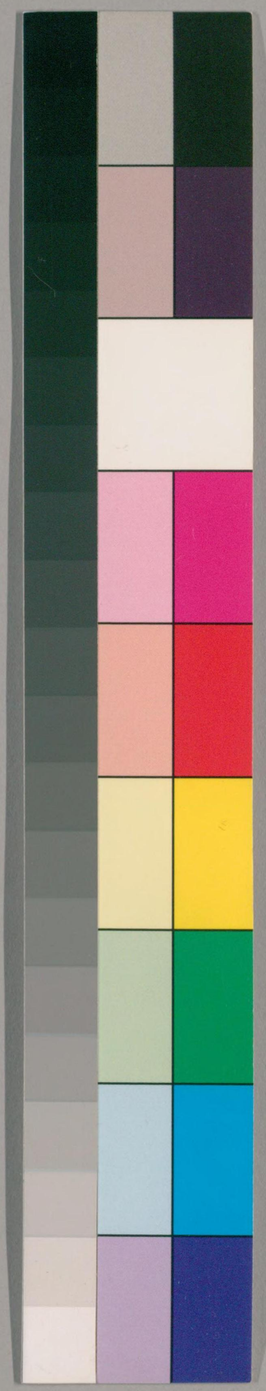
賀茂社記録　六十二

832
97
305

62



国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

文政三年

備忘

832
97
305

国立国会図書館　　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

○永昌記ニ　下鴨社者廿一年目造営
上賀茂社者雖為廿年之内破壊
之時者造営之ヽ

○四月条以後行幸并勅使奉ヽ神祿ヽ奉榊
也下社条以後三ヶ年奏桂ヽ奉ヽ

○法右記目錄抜

長治三年　四月改元
為嘉美

四月九日改元定嘉美　十三日殿下従東三條
還御賀陽院　夜半許賀茂上社
正殿焼亡有陣定（例ニ依不）　御卜廢朝事

大正
7. 2. 2
購求

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

被奏議　十八日賀茂焼亡定　諸道勘文　廃朝三ケ日
廿一日午御禊延引　廿三日斎院御禊警固
召仰上卿不参　廿三日召仰廿四日賀茂祭
使左少将顕国　中宮使宗佐　東宮使仲章
廿七日戊子政始前斎院入内　禁中給御対面
東宮々々行啓入御内裏賀茂迂宮日時
被勘殿下由祈山僧御読経　五月一日壬辰
奉幣賀茂社　七月廿六日乙卯賀茂上社
遷宮八月三日陣定　賀茂火事罪名
流罪　賀茂社
兵火輩　九日被行

○中御門
宣胤卿記　為定徳元　長享三年五月四日
明日賀茂競馬　為継平三位着用冠袴
表袴大帳石帯　玉木借之　織中禅所
物不可用之由　雖仰老死職事　自今日三
千日慥之不用葬礼日　教之条社例之由ト
云々　老不之能事
可有其事歟
○謹按指貫浄衣上着歟ノ　右ハ布衣姿ト云
四月十六日武家ニ往昔ハ此布衣姿ニ石帯
ヲ着シトカ

年號寺
○親長記
長享二年廿三日 賀茂神主継平勝主申境内
地田事去年 奏聞安堵之上ニ無弾煩之由
一 官言上之次ニ 先年 奉書可申奉行職事
ハ伊予 正四位事 是又去年 奏上
口宣案 于今不給之間 同名
了去文安四年 偏ニ御教書
○同記
同年十二月九日 今日 奏聞 又申西位下
賀茂貞久勝主 階事 伊云年齢
多々九十三ニ申ス 祖父年齢 如何

一 勘文時分ニ申ス由 先年
同十二月貞久勝主 階
者奉奏去於蔵人弁宣 秀
○葵祭始 欽明天皇十八年
○御生所者 皇太神宮降
御圍之内ニ降臨石アリ
○本宮始 今ニ所ニ御造立 天武天皇之
御宇 當時四月御生所 御圍
天武天皇御宇當本宮ニ被
ヲ今ニ被祝行也

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

○御園ニ藤ヲ植ル始ハ名所ニモノ清茂
考ニ神代之鈴ヲ歌ニ御生ト引ル事ト見ユ

○葵祭近衛使古来甲午年右中将乃年右
中将ヨリ去ル天明ノ大火ヨリ乙丑年右甲年ト
成右ト改ル

○日祭無申酉ヲ不被用事故実ニ國祭ニ
故ニヲ

○葵祭御舟無元禄七年

○日祭之土之馬右代寮ヨリ出時十二疋ハ内十疋
十列ツヽ二行ニ當社被奉ニ十二疋ハ松尾社奉給之
由宣命ニ載有ヽヽヒヒ

○日祭勅使斷絶ヒ後於社家社頭ヒ様ヲ
行ヒ之馬モ走リ伺文金津ヨリ神主ヨリ
出ヒ事ヲ正祢宜西祝權祢宜木以上五疋
古代之馬ヒ事ヲ當日前日代ヒ各欠ヲ
知ヘシ

○文化十年ヨリ葵祭ヒ東舞被改橋殿前
有ヒ半時ヲ長リ成リ是迄橋殿ヲ
日年ヨリ被用室暦三年之例勅使参向
以前神前之式相済橋ヲ作ル亦同事ヲ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　　ガラス使用

之馬ヲ北ニ向ヒ牽ク被改是ヲ南ヘ走ル

○賀茂臨時祭始ル宇多天皇寛平年中

○石清水臨時祭始ル一條院御宇寛平ヨリ八十年斗後ノ事

○賀茂臨時祭断絶ス後花園院ノ頃ヨリ於社家社頭之儀手再興ス其年之精進頭人中勅使ヲ立ラル事ヨリ精進ニ入テ三年ニ其年ヲ勤ル慣例ニ候テ三年ニ一度ツヽ勤行ス

○文化九申年六月七日石清水賀茂臨時祭御再興被仰出翌年ヨリ両社陽年ニ被行也

○御生所之神館ノ齋院潔齋ノ御殿旧跡ノ事

御本殿旧跡ハ聖神宇ノ北ニ有リ

○流木社ハ山森三社ノ流ヲ止給処ノ旧跡ニ有リ

○中賀茂社ニハ流木社ニハ御神躰之由往古ヨリ申伝ル事ニ候

○松尾日吉ニ下鴨ハ本社園社ハ御分霊ニ候ト申伝ル事ニ候

右三ノ条

○延文元年ノ頃ヨリ祭使ニ神祇官ヨリ参ル事ハ不知享保元年ヨリ参ル事ハ桂一枝ヲ例ニ由従勅使ニ渡ス事ニ候

有之時ハ葵三本ニ而ハ不足ニ付有合次第ニ而ハ何ニ而も有合次第ニ而ハ何ニ而も有合次第ニ而ハ何ニ而も

荒和祭　若御祖

延喜式云六月晦日祭
とあるは今神前の宮にて
ま大同して貢末のこと
六月は閏月あるも祭
ぺとのみ祭の六月
康饗なるべきを

○御樂　群記勘饗ニ

當社往昔造替之節ハ祝
延年舞ありし延宝のはじめ
寛永五年當社御造替
ホ六の市辻宮祝家能
かゝる上古ハ田楽
無衰者雅弘治天
雅若宮の神勤
口平家物語九巻ヨ

（げばい）上賀茂さいごのときく
云つゞし写ホのゝてげ

弘治天正ニ能有
氏之記云十二月
於廣庭南芝
舞ホ雅有
當社樂既矣白

とついくの四のそりのさき
ささそ悔の中へそ入り
下ゲ芥 下鞋
尾猶云
○御箱屋し洋板ヲ三色(ミイロ)ニ
碎ル為し卜ニそ古へハ三色ニ染ヲ施し故ニ三
尾猶云
色木ト再云
尾猶云
○玉橋ノ紋已雁木 古代ノ物ト云ヘシ
右二ヲ社家諸支配
ユフメスキ
木棉手襁 木棉(ゆふ)ハ
○ 幣(ぬさ)の名ニまぎらはしきの名也
助のみ

○元禄七年釜御祭御幣奥ノ舛
下行米三百三拾六石弐斗ニ時ニ
神宝行列ハ朝廷ニ
翌(あくる)
南舛五百五拾壱石余ニ
神宝行列ハ朝廷ニ
宝ヲ行列ニ
○八幡
放生会ニ御幣奥更宝七年八月十五日
○関東ニ釜使慶長十五年ヨリ初テ
到ル勅使仕来寛文四年ヨリ

斗ニ奉仕ノ向寛文四年ノ記録ニ
正勇勢仕ノ向ノ茶ニ菱ヲ
ふるまひ古ハ步行ニテ乗ラ
○三信保羅ニ家ハ寛文四年ニ
赤ハ向ノ菱飯上ニ丸ノ向ノ
有ノ如ク止ニ仰ノ
○清廉祖義濃守清國ニ息女源秀次公ニ仕
ヘ公ハ月宮ニ於テ三条
辞世ノ和歌有

○樵談治要ニ云ハ二社ノ内ニ石清水吉田
祇園北野ノ四社ヲ延喜式ノ神名帳
ハ勿論ニ社ニテ式外ノ神
ヲ加ヘ六十九社ト号ス朱雀院ノ御宇ノ長暦
三年ノ月ヨリ十二社ハ
落ス不增不減
○散位四位五位無官之人ニ記之ヲ職原ニ
見ヘタリ

○寛永四年四月九日申刻清秡當社陰陽
師宗勝勅之
○貞享三年正月十五日貴船禰宜神主清
祐宜森連文祝賢久恭向于貴布祢
下向之時騎馬過一鳥居拘葉馬過鳥
居之人者被放氏人古法而五月五日
競馬葉尾或逆馬揚或不慮相馳之
討者態令落馬之社法也然今當社法
始者古法無紀明者社法永可陵遲
也因及一社之評議之処雖可被放社家
例神主維久偏數度懇望真答之
間於向後者急度可被守古法之旨
社中所被宥助也
○正徳六年四月十一日 中御門御宇當本
"保可之男保喬叙従三位是當社
神主五十末滿上階之初例也云々
○寛保二年櫻町院御宇當社御遷営
之度貴布祢社始木造日時定風記

宣旨同端社儀迂宮風記 宣旨等者依
御敬神今度始也其外若宮泰良沢田
氏神等四社正迂宮日時定風記 宣旨
者依一社願今度始被下也

○寛保三年為御造営御礼神主應平
雑掌淑兼貴布祢惣代祢宜保部
已上三人発駕東武御暇之節次貴布祢惣代祢宜是
上社惣代次下社惣代祢宜
先格也

○寛延三年九月廿七日 桃園院御宇社家一
統被停任官旨御奉行清宋寺右中弁
益房被仰渡于一社

一右者近代社家之輩任官雖流例若
代者為社職位階計之儀伊勢両宮
之祢宜等者古代之通至于今無任官
之輩依之 櫻町院御在世之中御吟
味有之社家任官之儀諸社一統可被
停旨有御治定而今度社家一統任

宮被停止可為社職位階計之旨被
仰出

同年十二月十八日如旧任宮被復畢

○寛延二年九月九日本宮御内陣鼠難
之事有之于時神主應平元延事

○同四年為宝暦元三月十一日神供海老
酒殿釜鳴[illegible]伐神山木[illegible]神山鳴動[illegible]
右四ヶ条一件之事有之
于時神主正久元心季

○安永八年権殿御内陣御舘太刀一件
之事有之于時神主博久

○社説
應永年中家久男季久正祢宜之時御手代
會後朝猿樂折節院御所田祿之間
猿楽之能ヲ被止者也

○文政元寅十二月十九日夜於経盛亭代官
○後記讀会之席一巻有之旧地下三位氏父
之画像清茂翁自筆一覧此像半白し
老人也立烏帽子浄衣大紋剌袴白地八藤

江尊 菱錢 節ハ不見未詳
若

一 社浄衣之露今云直垂露ニ
当外袴茂ニ白ク引ニ露ニ

一 浄衣ニ武袖下ニ引ニ露今云狩衣
引ニ露ニ短キ事ハ不審ニ候
右ニ図今仍用模写ニ秘蔵ス

一 御生所神館之事
四月御園ニ移ル神院ハ
神殿御所ト云ヘ其ノ御所
ハ御所ニ非ス故ニ云ヘキニ
云ヘキニ云ハ御所ニ非ス
御造営ニ依テ仮ニ
細殿ト右ヘハ部ありし
ニ依テ除ル之
一 御籍（籍）事 芳ハ今ニ土屋ニ

よ侍所あり其仕えよ縣重て所司変
し預くるものへその後侍下ちまちまつて
廂屋に移さる亦透廂よ移さるし道よ
今の御所は移さるし儀なり
○御前預後各代官青侍後へ
始ら兼俊也ト有福大
次に氏人宗保兼俊之
代官始
も○見えたり
○元文二年貴船出入
代官始
一社惣代関東

不向之内保堅於江戸病死依之跡、恩
賞一義老若中数日参上往来
三年一の年也、評定
○前件官記
氏人治久、女新院下
○文化十一年賀茂臨時祭再興
使 検校屋 古兵衛督
舞人 油小路隆通朝臣
阿野 宣直朝臣
柳原 隆光
園池 公周

加陰近 柳原愛寿
豊仲朝臣
高野 倭寿朝臣
中川 長貞

細川源蔵
少納言
大石信寄

評定所
多久弥
窪田義
多忠淳
奥好吉
大長
安信季常

○牛痘後報
享保十五年昔
倭文庄之馬當年治
家近年業馬不出来
依之馬之内権祝之当年分家
子牛之馬ヲ立今牛ハ倭文庄
評定仕之一疋民蔵ニ表ヲ
仕立家業専田与其業ニ
尤此時右之儀年之
業ヲ本牧注五疋
○同治元年四月廿七日
年人正拳直病氣ニ
往来田ヲ上ル三州ヨリ引越候
評議之上此料当年ヨリ収納
変ヲ之

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

○同記曰年九月十九日
林宣旨正祝詞勅使
勅定之次第初令此書
之覧白近例依仰奏旨
清書奉之

○競馬會自寛治七年至文政三年
七百十七年

○當宮能大夫樂記之事
寛永五年御造営之比自
貞享三年迫

矢田大夫代々勤之
初代 矢田孫右衛門尉 二代
三代 矢田平右衛門

貞享四年ゟ元禄十一年迫
木村主膳勤之

元禄十二年
川北八郎右衛門勤之

元禄十三年ゟ文化十四年迫
初代
川勝助之丞

文化十五年　改元　文政二年二ヶ年之間
文政三年ゟ初而舊川勝初之
文政三年ゟ初而舊川勝初之
川勝多之助
谷自寛永五年至文政三年百九十三年ニ

右出張書

謹而出張中上品状

等被相述家内未熟之事一親族之
事情も未熟之事一郷中隣家
他家未熟之儀被申之候事一
於式家を宿社務り之社職之
事

右之通社伝法一社一同申聞
元文五年三月六日

高先年故
神祭中

山本大学亀
[illegible]

松室内蔵頭
[illegible]

松下右衛門尉
[illegible]

○同九日同年七月十五日
一出仕等於今城中納言殿
禁裏出縁之和哥御会
伝奏事

八ヶ

一正五位下行左近衛少将賀久敏朝臣従五位上行
左近衛少将兼久通朝臣
参入事

一外陣等ニ出張ノ亜ニ而上ニ
ヲ亜シ出張ニ入ル掛等出勤
神事ニ傳通被申ニ而ハ掛
勤ニ而ハ初種ノ儀中ニ
今度来社頭ニ於亜今
被ニ掌保方ニ云ニ茂亜
被歟ニ而発表ニ而ニ津
布ニ而失策宝庫ニ
閏七月二日

一亜等神事ニ元年ニ
ニ候御上ニ大歟ニ御ニ
納ニ九月ニ事ニ
旧内陣ニ納ノ義ニ
聞ニ候ニ仕候ニ
外ニ奉歟ニ元年ニ
ニ而ニ茂ニ而ニ
ニ而ニ仕候ニ
ニ而ニ仕候ニ
ニ而ニ仕候

一昨年之通之内宮并七社一殿并
傳進ル祓之和歌等ノ祝詞等ハ
社ニハ南宮条向之傳進 殊七社ハ皆之日供之通
書之事傳進ル但末社祝詞之儀ハ
○同記
元文三年正月 于時関白 一條 兼香公
鳥居大路應平之男金平七才之時貴布祢祝職
新補未剋之外幼年之例社地吟味之事
寛享二年六月廿八日ノ状ニ以後十七未
満之社職中上之条ニ而ハ
是ハ富野隆之 改致し
候ニ付 依之連文中上之由ニ

元禄五年八月廿八日ノ梅辻職久悴孝平九才
之木船祝中上 勅許之
不見ル

同記元文四年四月十七日ノ表紙ニ
大路金平貴布祢祝ホ
付之当 于時関白 ■ 日上

此度之社祝貴布祢祝ホ
新補之義ハ幼年社職中上之義ニ先年
ニ而ハ無之ハ幼年社職ニ而も
も之義ニ而ハ無之ハ
も之義ニ而ハ無之ハ
も之義ニ而ハ無之ハ

以来之例ニ者仕方等ハ仰渡ニ而ハ無之候ヘ共
社中ニ而ハ仰渡ニ候ハヽ可相心得候事
一社家ニ而ハ神事ニ而ハ不苦候ヘ共
此外ニ而ハ平候而ハ不相成候事
一社領ニ而ハ百姓ニ対シ悪口ヲ申掛ケ
候ハヽ其ニ応シ過銭ヲ可申付候事
一社家ニ而ハ百姓ニ対シ無礼

変ハ北方不吉ノ処ヲ禁心ヲ変ニ表ス
アラサルヲ

○同年十一月
御更条御料宿仕官顕言ニ于ヲ先勅旨
并官庁ヲ初ヲ始ム

○同九年八月
参事始ム 従前ハ社司ハ狩衣
ヲ又ヲ保八年ヨリ社司氏人共物ニ於ヲ
供奉ハ何時ヨリ上ヲ始ム詳ニ知ル事ヲ能ハス

○同年四月 氏人叙爵年齢十五才未満ノ例
天和二年二月 氏人保言十四才

元禄三年二月 氏人保萬麿
慶長九年十 氏人清右七才
同 十三年五 氏人相久七才
同 十四年十一 氏人清善九才
元和三年十一 氏人清意七才
寛永五年十二月 氏人伊平十二才

氏人任官十五才未満ノ例

慶長十二年十一 刑部権少輔清右
同十四年九 右衛門尉相久八才

○往来田訴論記

享保十年八月三日往来田出入
訴差出願書之内例書之
一文明八年光寿寺領
十一ヶ寺ヨリ往来田ヲ請ル
同十年十三ヶ寺ヨリ精進頭役勤申ス
一同十五年福松寺ヨリ清秋
七ヶ寺ヨリ往来田請ル
一同十九年十二ヶ寺ヨリ精進
一永禄六年保筆後内西ノ
三ヶ寺ヨリ往来田ヲ請ル

同十年七ヶ寺ヨリ精進頭役勤申ス

○権祝記

明暦元年社家ヨリ
郷ノ言上之内

放當社中悪病人癩病
之社法之ヲ上ヲ
○梅辻起文之父与久阿云
二男ヨリ数多氏ヘ
養子ニ入ル是
ヲ梅辻家ト名ル

○西賀茂神光院ハ松下祖

森祖常基、

○神主霊服之時辞儀ハ如例、
内ニ而勧請不成放古来ニ
○神帥ハ古ハ神主ト書之時ヨリ神帥ト書セル例
○明暦二年ニ比西池門書助葉後為二條殿諸大夫之家司

○有顕国顕行顕三代為権鷹司殿諸大夫、
今称顕家祖、

○国顕男達顕、有鷹ヲ以殿姫君ヲ被嫁附被附ヲ則為二條家諸大夫、
是今敏顕之祖、

○清茂之才清清享保十二年冬於伏見
宅諸大夫ニ而卒田中家再興、

○燈灯悩之事
泰連久秘訣云 正月ヨリ子日ニ
まて初春谷東上少而
す是ヲ用ひまつる
あまつすむら神前
```
```

神人共ニ楽ヲ奏シ擯（つま）ヲ撫（なで）テ
権祝行周祝詞ヲ奏シ畢（おわ）テ
楽止（やむ）ノ後（のち）モ亦（また）ソノ
ヲ（を）ヲ（を）ヲ（を）

六位ニアラス不書之
被制禁之者不書之昔ハ六位七位之
書式之唯今位署書之
様歟之

○毎年正月卯杖御神事精進頭五人
勤之若卯杖御神事精進
時者右馬供供奉之若亦闕職方
時或代官故障之時者新精進人之頭補
勤之右頭國宮中神事勤方記之
文政三年正月卯杖年中神事ニ
貴船祝有之心仍之新精進人
但此時豊顕之庄頭代官
立次之勤之

○婚姻祭下行米被渡候元
文五年之事

寛保二年二月十六日季山往来田之筒被上来
元小口白顕早速符之儀
同月廿二日白顕差出之儀
御祭奉向料之儀一
今日之奉書及披
者不被更之儀成
百四十八人内ハ加
参詣之儀也

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

白顕、元房ひそかに成り給ふ
ひそかに元房此儀云々しかる
尚年々其分二千疋て献ぜ
元禄
○清冬日記
延宝二年十二月朱九日於賀茂傳奏葉室中
納言殿神主ゟ献上関
ゟ他国、他行ゟ
無事ニ帰ゟ
ゟ帰休之

日記

○夫臨時祭者人皇五十九代宣多天皇之御宇
寛平元己酉年十一月七日被始行之其時之
祭使右近衛中将藤平時平也其後中絶
中興光仁帝未有尋復称王侍従之時遊
猟于賀茂之日雲霧俄降而失却前路于
茲大明神現御歌而可賜陰時祭之由
詔親王有神約依之尋復被進此祭
毎年ゟ恒典下酉日被行之ゟ自寛平
元至一万治元及七ゟ七十年也或記云
新嘗会之後酉ニ有二卯時少十二月之酒
又旧記云下酉日有除時祭之事ゟ侍臣

今案用五節度國之
時祭勤及十二月之此祭中絶而乃社中再
興畧行之事已及六年皆用中間勲行
之力一社之佳例也今於禁裏無別當
今五節之故也若古代之儀或朝
頭之不淨之皆以非私之不為者也然今
度矩又相伴起又奏布祢祝迎祭月而不顧
神慮赴于他國高掃除相當當日諸
之氏人超久史子令勤神主之神役殊以其
私用恒年之條叶祭有延引及于
来八日之条言語道斷葭古者之社法不
恐神慮之所致具罪科不少者乎社中憤
之往一社之旧例欲循參向而勤通之解
怠雖遅于傳參未及御下知者也仍為
後覧粗所記如件

万治元戊年十一月廿九日

右靖足縣主自筆之書記在予家写之了

久恐御請書
一上賀茂社領小山之儀近年百姓共一統困窮社
御年貢等御収納被仰付候処ニ今般小山
御検地之上御年貢及御納米之儀ニ付而者
格別之事ニ候間御請書差上候様ニ
被仰渡候ニ付而者御請書差上候上
寛廉元年亥九月廿日
小山
庄屋 清兵衛
年寄 仁左衛門
〃 長兵衛
〃 久左衛門
惣百姓 仁左衛門
市三郎
御奉行様

○祭事始再興　天和二年正月十二日
一人或ハ二人
三人ニ初例
享保十六年正月十二日
吉田社祝
明文中四年正月廿五日
当布袮ニ宣
應平四年
春日
奈良社祝
保貴
従四位下行左一戈
従四位下守四戈

口宣案同日頂戴ニ載

錄畧記祝祠漫草　二

祭事始再興

天和二年正月十二日

申　従五位下　兼行近江介　大

下鴨　人

権祢宜

申　従四位上　祐栄

○往来田訴訟記

一享保十二月十二日奉行所御呼出ニ付
一往来田訴訟取扱者共今何人
　寺社和泉守殿へ事

右往来田享保元年ニ者唯今百十人
　方ニ而古ニ内高時禁裏院中御
　非義人取次候共外諸家諸寺
　乍下寺ニ而ニ御免ニ而ニ
一三室ニ氏人何人程方ニ
　右三室ニ氏人三十人ニ定ニ
　三万石ニ人方ニ

一往来田古帳　一巻
　此一巻古キ故不読ニ
　ニ而ニ知ニ兵万四郎人ニ
　古帳ニ写ニ事

一文明十六年氏人置文　一巻
　此一巻ニ而ニ恵仁元年ニ
　則万四郎人ニ負ニ

一九年生年四十七年
右百四枚人 右里人
一安徳二年氏人墨文
百四枚人連名
一永正九年墨文
百四枚人連名
一天正十七年
百四枚人連名
一天正十七年御検地之時百姓人生業
一元和七年氏人神前番帳案
百四枚人
一寛永九年氏人番帳写
百四枚人
一正保二年氏人起請文
百四枚人
一明暦三年座席次第
百四枚人
寛文三年新写
一氏人百四十人姓業百四墨地百四枚人
首末二巻

一冊
一巻
一巻
一巻

乙上證文在評定預り之箱　私ニ云下略之

○延宝八年注進雑記　出来之正面家ハ莞爾
時社中惣代　与人林主馬　座豊　山本丹波　筆述

○代官渡地

一延宝八年十二月十六日
精進頭中制禁之事
一山河猟之事
一揉鹿病年中名代被立ル事
一猥ヶ間敷遊興之席連ル事
右之通向後可被相慎ル事

有ニ依テ為衆中急度可被遂吟味者也

延宝八年十二月　日

○少勘家五兵衛　寛永拾六年
指出之写

一寛永十六年三月十三日江戸ヘ参府之節
主水依指副右京ヲ以当年之
りニ而参上仕候
三ツ星の内
中務川上守生神

寛永十七年七月九日
一神ノ神社地下ニ来ル田ノ社ヨリ
十二ヶ所ニ社有之
一神ノ神社地下ニ来ル田ノ社ヨリ
十二ヶ所ニ社有之
一寛永廿年卯月九日ニ右之
将監生来田ノ上ヶ
一寛永廿年卯月九日ニ右之
将監生来田ノ上ヶ
一定法度之事
一神ノ社ハ清基有之
一雖為不審仁千河之
一雖為不審仁千河之
一親子兄弟無依怙仁
一親子兄弟無依怙仁
一寛永廿年卯月九日

露顕者て候間同罪をや
処永
寛元年七月日
一保四年四月廿日ニ読ニ
被ニ流ニ処ス
西地伊豆ニ
山東右京亮ノ出家
うけ丸、生年仕て
罪出雲ニ
系て処ス
志ニ

此者も仰家ニ有リ年来奉上ル状

一上賀茂表御藪土居ノ間ニ墓所
ヨリ不苅生馬拾場一ケ所
御捨地之節新開被
仰付候ニ付而ハ古ク之
墓所ヲ退ク事ニ而ハ無之候ニ付
御断ヲ上ケ候ニ御聞届
無滞相済候事

一延寶七年 御公儀御修復料御捨地之節
右之場所社家ヨリ御願
申見候ニ而ハ無之事

一寶永三年 右之墓所改葬之義被
仰付候ニ付而ハ此所ニ而ハ墓地往昔ヨリ賀茂之
墓地ニ而改葬仕候事ニ付社家共ニ而ハ無異論
職人頭 御断申上候ニ付
御奉行所ヨリ両御奉行所
ヨリ各唯今以其通ニ
右之通ニ墓所之
儀ニ付而ハ
御奉行所

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

日人家 元禄四年九月 芸年帳ニ
一川尾社ヨリ七人ヲ安元年二度
八日ノ申酉ノ時ヨリ酉ノ刻マデ
ニ日夫ニ被仰付
一二日社内ヲ七ツヲ二ツ
ハヤシ社務森ヲ
修理ヲ定ル七ツヲ仕
一慶安元年四月七日
一日年子月朝ヨリ但馬守
一今年但馬守将監
一二月ノ祝
子ノ代ニハヤシトイフヲ
死去
一二月一日ヨリ高尾ヲ
年号ヲ二ツ芸ノ山ニ
死去
一今年但馬守将監
芸馬仕リ二ツニ折
年重文ヲ方住果田
十二ケ年ニ
許可ヲ下シ於一ノ申
戌ヨリ 寛文寅
表地ヨリ上ケ申

一

一 安元年十月

賀茂社家中

一 康安四年二月 日 院

一 日年三月十日 周防守

一 森 社 社

一 日年三月 日 女院

一 日年 月 日

へ出張被
人を添らる三位様ゟ
たてまつる之

一日年四月九日小坂殿
御参詣ニ被遊御社参
ニ而来ル廿日森へ御泊
ニ而来ル廿一日森へ御泊
ニ而来ル廿二日森へ御泊
ニ而来ル廿三日森へ御泊
ニ而来ル廿四日森へ御泊
ニ而来ル廿五日森へ御泊
ニ而来ル廿六日森へ御泊
ニ而来ル廿七日森へ御泊
ニ而来ル廿八日森へ御泊
ニ而来ル廿九日森へ御泊
ニ而来ル三十日森へ御泊
ニ而来ル三十一日森へ御泊
ニ而来ル三十二日森へ御泊
ニ而来ル三十三日森へ御泊
ニ而来ル三十四日森へ御泊
ニ而来ル三十五日森へ御泊
ニ而来ル三十六日森へ御泊
ニ而来ル三十七日森へ御泊
ニ而来ル三十八日森へ御泊
ニ而来ル三十九日森へ御泊
ニ而来ル四十日森へ御泊
ニ而来ル四十一日森へ御泊
ニ而来ル四十二日森へ御泊
ニ而来ル四十三日森へ御泊
ニ而来ル四十四日森へ御泊
ニ而来ル四十五日森へ御泊
ニ而来ル四十六日森へ御泊
ニ而来ル四十七日森へ御泊
ニ而来ル四十八日森へ御泊
ニ而来ル四十九日森へ御泊
ニ而来ル五十日森へ御泊
ニ而来ル五十一日森へ御泊
ニ而来ル五十二日森へ御泊
ニ而来ル五十三日森へ御泊
ニ而来ル五十四日森へ御泊
ニ而来ル五十五日森へ御泊
ニ而来ル五十六日森へ御泊
ニ而来ル五十七日森へ御泊
ニ而来ル五十八日森へ御泊
ニ而来ル五十九日森へ御泊
ニ而来ル六十日森へ御泊
ニ而来ル六十一日森へ御泊
ニ而来ル六十二日森へ御泊
ニ而来ル六十三日森へ御泊
ニ而来ル六十四日森へ御泊
ニ而来ル六十五日森へ御泊
ニ而来ル六十六日森へ御泊
ニ而来ル六十七日森へ御泊
ニ而来ル六十八日森へ御泊
ニ而来ル六十九日森へ御泊
ニ而来ル七十日森へ御泊
ニ而来ル七十一日森へ御泊
ニ而来ル七十二日森へ御泊
ニ而来ル七十三日森へ御泊
ニ而来ル七十四日森へ御泊
ニ而来ル七十五日森へ御泊
ニ而来ル七十六日森へ御泊
ニ而来ル七十七日森へ御泊
ニ而来ル七十八日森へ御泊
ニ而来ル七十九日森へ御泊
ニ而来ル八十日森へ御泊
ニ而来ル八十一日森へ御泊
ニ而来ル八十二日森へ御泊
ニ而来ル八十三日森へ御泊
ニ而来ル八十四日森へ御泊
ニ而来ル八十五日森へ御泊
ニ而来ル八十六日森へ御泊
ニ而来ル八十七日森へ御泊
ニ而来ル八十八日森へ御泊
ニ而来ル八十九日森へ御泊
ニ而来ル九十日森へ御泊
ニ而来ル九十一日森へ御泊
ニ而来ル九十二日森へ御泊
ニ而来ル九十三日森へ御泊
ニ而来ル九十四日森へ御泊
ニ而来ル九十五日森へ御泊
ニ而来ル九十六日森へ御泊
ニ而来ル九十七日森へ御泊
ニ而来ル九十八日森へ御泊
ニ而来ル九十九日森へ御泊
ニ而来ル百日森へ御泊
ニ而来ル百一日森へ御泊
ニ而来ル百二日森へ御泊
ニ而来ル百三日森へ御泊
ニ而来ル百四日森へ御泊
ニ而来ル百五日森へ御泊
ニ而来ル百六日森へ御泊
ニ而来ル百七日森へ御泊
ニ而来ル百八日森へ御泊
ニ而来ル百九日森へ御泊
ニ而来ル百十日森へ御泊
ニ而来ル百十一日森へ御泊
ニ而来ル百十二日森へ御泊
ニ而来ル百十三日森へ御泊
ニ而来ル百十四日森へ御泊
ニ而来ル百十五日森へ御泊
ニ而来ル百十六日森へ御泊
ニ而来ル百十七日森へ御泊
ニ而来ル百十八日森へ御泊
ニ而来ル百十九日森へ御泊
ニ而来ル百二十日森へ御泊
ニ而来ル百二十一日森へ御泊
ニ而来ル百二十二日森へ御泊
ニ而来ル百二十三日森へ御泊
ニ而来ル百二十四日森へ御泊
ニ而来ル百二十五日森へ御泊
ニ而来ル百二十六日森へ御泊
ニ而来ル百二十七日森へ御泊
ニ而来ル百二十八日森へ御泊
ニ而来ル百二十九日森へ御泊
ニ而来ル百三十日森へ御泊
ニ而来ル百三十一日森へ御泊
ニ而来ル百三十二日森へ御泊
ニ而来ル百三十三日森へ御泊
ニ而来ル百三十四日森へ御泊
ニ而来ル百三十五日森へ御泊
ニ而来ル百三十六日森へ御泊
ニ而来ル百三十七日森へ御泊
ニ而来ル百三十八日森へ御泊
ニ而来ル百三十九日森へ御泊
ニ而来ル百四十日森へ御泊
ニ而来ル百四十一日森へ御泊
ニ而来ル百四十二日森へ御泊
ニ而来ル百四十三日森へ御泊
ニ而来ル百四十四日森へ御泊
ニ而来ル百四十五日森へ御泊
ニ而来ル百四十六日森へ御泊
ニ而来ル百四十七日森へ御泊
ニ而来ル百四十八日森へ御泊
ニ而来ル百四十九日森へ御泊
ニ而来ル百五十日森へ御泊
ニ而来ル百五十一日森へ御泊
ニ而来ル百五十二日森へ御泊
ニ而来ル百五十三日森へ御泊
ニ而来ル百五十四日森へ御泊
ニ而来ル百五十五日森へ御泊
ニ而来ル百五十六日森へ御泊
ニ而来ル百五十七日森へ御泊
ニ而来ル百五十八日森へ御泊
ニ而来ル百五十九日森へ御泊
ニ而来ル百六十日森へ御泊
ニ而来ル百六十一日森へ御泊
ニ而来ル百六十二日森へ御泊
ニ而来ル百六十三日森へ御泊
ニ而来ル百六十四日森へ御泊
ニ而来ル百六十五日森へ御泊
ニ而来ル百六十六日森へ御泊
ニ而来ル百六十七日森へ御泊
ニ而来ル百六十八日森へ御泊
ニ而来ル百六十九日森へ御泊
ニ而来ル百七十日森へ御泊
ニ而来ル百七十一日森へ御泊
ニ而来ル百七十二日森へ御泊
ニ而来ル百七十三日森へ御泊
ニ而来ル百七十四日森へ御泊
ニ而来ル百七十五日森へ御泊
ニ而来ル百七十六日森へ御泊
ニ而来ル百七十七日森へ御泊
ニ而来ル百七十八日森へ御泊
ニ而来ル百七十九日森へ御泊
ニ而来ル百八十日森へ御泊
ニ而来ル百八十一日森へ御泊
ニ而来ル百八十二日森へ御泊
ニ而来ル百八十三日森へ御泊
ニ而来ル百八十四日森へ御泊
ニ而来ル百八十五日森へ御泊
ニ而来ル百八十六日森へ御泊
ニ而来ル百八十七日森へ御泊
ニ而来ル百八十八日森へ御泊
ニ而来ル百八十九日森へ御泊
ニ而来ル百九十日森へ御泊
ニ而来ル百九十一日森へ御泊
ニ而来ル百九十二日森へ御泊
ニ而来ル百九十三日森へ御泊
ニ而来ル百九十四日森へ御泊
ニ而来ル百九十五日森へ御泊
ニ而来ル百九十六日森へ御泊
ニ而来ル百九十七日森へ御泊
ニ而来ル百九十八日森へ御泊
ニ而来ル百九十九日森へ御泊
ニ而来ル二百日森へ御泊
ニ而来ル二百一日森へ御泊
ニ而来ル二百二日森へ御泊
ニ而来ル二百三日森へ御泊
ニ而来ル二百四日森へ御泊
ニ而来ル二百五日森へ御泊
ニ而来ル二百六日森へ御泊
ニ而来ル二百七日森へ御泊
ニ而来ル二百八日森へ御泊
ニ而来ル二百九日森へ御泊
ニ而来ル二百十日森へ御泊
ニ而来ル二百十一日森へ御泊
ニ而来ル二百十二日森へ御泊
ニ而来ル二百十三日森へ御泊
ニ而来ル二百十四日森へ御泊
ニ而来ル二百十五日森へ御泊
ニ而来ル二百十六日森へ御泊
ニ而来ル二百十七日森へ御泊
ニ而来ル二百十八日森へ御泊
ニ而来ル二百十九日森へ御泊
ニ而来ル二百二十日森へ御泊
ニ而来ル二百二十一日森へ御泊
ニ而来ル二百二十二日森へ御泊
ニ而来ル二百二十三日森へ御泊
ニ而来ル二百二十四日森へ御泊
ニ而来ル二百二十五日森へ御泊
ニ而来ル二百二十六日森へ御泊
ニ而来ル二百二十七日森へ御泊
ニ而来ル二百二十八日森へ御泊
ニ而来ル二百二十九日森へ御泊
ニ而来ル二百三十日森へ御泊
ニ而来ル二百三十一日森へ御泊
ニ而来ル二百三十二日森へ御泊
ニ而来ル二百三十三日森へ御泊
ニ而来ル二百三十四日森へ御泊
ニ而来ル二百三十五日森へ御泊
ニ而来ル二百三十六日森へ御泊
ニ而来ル二百三十七日森へ御泊
ニ而来ル二百三十八日森へ御泊
ニ而来ル二百三十九日森へ御泊
ニ而来ル二百四十日森へ御泊
ニ而来ル二百四十一日森へ御泊
ニ而来ル二百四十二日森へ御泊
ニ而来ル二百四十三日森へ御泊
ニ而来ル二百四十四日森へ御泊
ニ而来ル二百四十五日森へ御泊
ニ而来ル二百四十六日森へ御泊
ニ而来ル二百四十七日森へ御泊
ニ而来ル二百四十八日森へ御泊
ニ而来ル二百四十九日森へ御泊
ニ而来ル二百五十日森へ御泊
ニ而来ル二百五十一日森へ御泊
ニ而来ル二百五十二日森へ御泊
ニ而来ル二百五十三日森へ御泊
ニ而来ル二百五十四日森へ御泊
ニ而来ル二百五十五日森へ御泊
ニ而来ル二百五十六日森へ御泊
ニ而来ル二百五十七日森へ御泊
ニ而来ル二百五十八日森へ御泊
ニ而来ル二百五十九日森へ御泊
ニ而来ル二百六十日森へ御泊
ニ而来ル二百六十一日森へ御泊
ニ而来ル二百六十二日森へ御泊
ニ而来ル二百六十三日森へ御泊
ニ而来ル二百六十四日森へ御泊
ニ而来ル二百六十五日森へ御泊
ニ而来ル二百六十六日森へ御泊
ニ而来ル二百六十七日森へ御泊
ニ而来ル二百六十八日森へ御泊
ニ而来ル二百六十九日森へ御泊
ニ而来ル二百七十日森へ御泊
ニ而来ル二百七十一日森へ御泊
ニ而来ル二百七十二日森へ御泊
ニ而来ル二百七十三日森へ御泊
ニ而来ル二百七十四日森へ御泊
ニ而来ル二百七十五日森へ御泊
ニ而来ル二百七十六日森へ御泊
ニ而来ル二百七十七日森へ御泊
ニ而来ル二百七十八日森へ御泊
ニ而来ル二百七十九日森へ御泊
ニ而来ル二百八十日森へ御泊
ニ而来ル二百八十一日森へ御泊
ニ而来ル二百八十二日森へ御泊
ニ而来ル二百八十三日森へ御泊
ニ而来ル二百八十四日森へ御泊
ニ而来ル二百八十五日森へ御泊
ニ而来ル二百八十六日森へ御泊
ニ而来ル二百八十七日森へ御泊
ニ而来ル二百八十八日森へ御泊
ニ而来ル二百八十九日森へ御泊
ニ而来ル二百九十日森へ御泊
ニ而来ル二百九十一日森へ御泊
ニ而来ル二百九十二日森へ御泊
ニ而来ル二百九十三日森へ御泊
ニ而来ル二百九十四日森へ御泊
ニ而来ル二百九十五日森へ御泊
ニ而来ル二百九十六日森へ御泊
ニ而来ル二百九十七日森へ御泊
ニ而来ル二百九十八日森へ御泊
ニ而来ル二百九十九日森へ御泊
ニ而来ル三百日森へ御泊
ニ而来ル三百一日森へ御泊
ニ而来ル三百二日森へ御泊
ニ而来ル三百三日森へ御泊
ニ而来ル三百四日森へ御泊
ニ而来ル三百五日森へ御泊
ニ而来ル三百六日森へ御泊
ニ而来ル三百七日森へ御泊
ニ而来ル三百八日森へ御泊
ニ而来ル三百九日森へ御泊
ニ而来ル三百十日森へ御泊
ニ而来ル三百十一日森へ御泊
ニ而来ル三百十二日森へ御泊
ニ而来ル三百十三日森へ御泊
ニ而来ル三百十四日森へ御泊
ニ而来ル三百十五日森へ御泊
ニ而来ル三百十六日森へ御泊
ニ而来ル三百十七日森へ御泊
ニ而来ル三百十八日森へ御泊
ニ而来ル三百十九日森へ御泊
ニ而来ル三百二十日森へ御泊
ニ而来ル三百二十一日森へ御泊
ニ而来ル三百二十二日森へ御泊
ニ而来ル三百二十三日森へ御泊
ニ而来ル三百二十四日森へ御泊
ニ而来ル三百二十五日森へ御泊
ニ而来ル三百二十六日森へ御泊
ニ而来ル三百二十七日森へ御泊
ニ而来ル三百二十八日森へ御泊
ニ而来ル三百二十九日森へ御泊
ニ而来ル三百三十日森へ御泊
ニ而来ル三百三十一日森へ御泊
ニ而来ル三百三十二日森へ御泊
ニ而来ル三百三十三日森へ御泊
ニ而来ル三百三十四日森へ御泊
ニ而来ル三百三十五日森へ御泊
ニ而来ル三百三十六日森へ御泊
ニ而来ル三百三十七日森へ御泊
ニ而来ル三百三十八日森へ御泊
ニ而来ル三百三十九日森へ御泊
ニ而来ル三百四十日森へ御泊
ニ而来ル三百四十一日森へ御泊
ニ而来ル三百四十二日森へ御泊
ニ而来ル三百四十三日森へ御泊
ニ而来ル三百四十四日森へ御泊
ニ而来ル三百四十五日森へ御泊
ニ而来ル三百四十六日森へ御泊
ニ而来ル三百四十七日森へ御泊
ニ而来ル三百四十八日森へ御泊
ニ而来ル三百四十九日森へ御泊
ニ而来ル三百五十日森へ御泊
ニ而来ル三百五十一日森へ御泊
ニ而来ル三百五十二日森へ御泊
ニ而来ル三百五十三日森へ御泊
ニ而来ル三百五十四日森へ御泊
ニ而来ル三百五十五日森へ御泊
ニ而来ル三百五十六日森へ御泊
ニ而来ル三百五十七日森へ御泊
ニ而来ル三百五十八日森へ御泊
ニ而来ル三百五十九日森へ御泊
ニ而来ル三百六十日森へ御泊
ニ而来ル三百六十一日森へ御泊
ニ而来ル三百六十二日森へ御泊
ニ而来ル三百六十三日森へ御泊
ニ而来ル三百六十四日森へ御泊
ニ而来ル三百六十五日森へ御泊
ニ而来ル三百六十六日森へ御泊
ニ而来ル三百六十七日森へ御泊
ニ而来ル三百六十八日森へ御泊
ニ而来ル三百六十九日森へ御泊
ニ而来ル三百七十日森へ御泊
ニ而来ル三百七十一日森へ御泊
ニ而来ル三百七十二日森へ御泊
ニ而来ル三百七十三日森へ御泊
ニ而来ル三百七十四日森へ御泊
ニ而来ル三百七十五日森へ御泊
ニ而来ル三百七十六日森へ御泊
ニ而来ル三百七十七日森へ御泊
ニ而来ル三百七十八日森へ御泊
ニ而来ル三百七十九日森へ御泊
ニ而来ル三百八十日森へ御泊
ニ而来ル三百八十一日森へ御泊
ニ而来ル三百八十二日森へ御泊
ニ而来ル三百八十三日森へ御泊
ニ而来ル三百八十四日森へ御泊
ニ而来ル三百八十五日森へ御泊
ニ而来ル三百八十六日森へ御泊
ニ而来ル三百八十七日森へ御泊
ニ而来ル三百八十八日森へ御泊
ニ而来ル三百八十九日森へ御泊
ニ而来ル三百九十日森へ御泊
ニ而来ル三百九十一日森へ御泊
ニ而来ル三百九十二日森へ御泊
ニ而来ル三百九十三日森へ御泊
ニ而来ル三百九十四日森へ御泊
ニ而来ル三百九十五日森へ御泊
ニ而来ル三百九十六日森へ御泊
ニ而来ル三百九十七日森へ御泊
ニ而来ル三百九十八日森へ御泊
ニ而来ル三百九十九日森へ御泊
ニ而来ル四百日森へ御泊
ニ而来ル四百一日森へ御泊
ニ而来ル四百二日森へ御泊
ニ而来ル四百三日森へ御泊
ニ而来ル四百四日森へ御泊
ニ而来ル四百五日森へ御泊
ニ而来ル四百六日森へ御泊
ニ而来ル四百七日森へ御泊
ニ而来ル四百八日森へ御泊
ニ而来ル四百九日森へ御泊
ニ而来ル四百十日森へ御泊
ニ而来ル四百十一日森へ御泊
ニ而来ル四百十二日森へ御泊
ニ而来ル四百十三日森へ御泊
ニ而来ル四百十四日森へ御泊
ニ而来ル四百十五日森へ御泊
ニ而来ル四百十六日森へ御泊
ニ而来ル四百十七日森へ御泊
ニ而来ル四百十八日森へ御泊
ニ而来ル四百十九日森へ御泊
ニ而来ル四百二十日森へ御泊
ニ而来ル四百二十一日森へ御泊
ニ而来ル四百二十二日森へ御泊
ニ而来ル四百二十三日森へ御泊
ニ而来ル四百二十四日森へ御泊
ニ而来ル四百二十五日森へ御泊
ニ而来ル四百二十六日森へ御泊
ニ而来ル四百二十七日森へ御泊
ニ而来ル四百二十八日森へ御泊
ニ而来ル四百二十九日森へ御泊
ニ而来ル四百三十日森へ御泊
ニ而来ル四百三十一日森へ御泊
ニ而来ル四百三十二日森へ御泊
ニ而来ル四百三十三日森へ御泊
ニ而来ル四百三十四日森へ御泊
ニ而来ル四百三十五日森へ御泊
ニ而来ル四百三十六日森へ御泊
ニ而来ル四百三十七日森へ御泊
ニ而来ル四百三十八日森へ御泊
ニ而来ル四百三十九日森へ御泊
ニ而来ル四百四十日森へ御泊
ニ而来ル四百四十一日森へ御泊
ニ而来ル四百四十二日森へ御泊
ニ而来ル四百四十三日森へ御泊
ニ而来ル四百四十四日森へ御泊
ニ而来ル四百四十五日森へ御泊
ニ而来ル四百四十六日森へ御泊
ニ而来ル四百四十七日森へ御泊
ニ而来ル四百四十八日森へ御泊
ニ而来ル四百四十九日森へ御泊
ニ而来ル四百五十日森へ御泊
ニ而来ル四百五十一日森へ御泊
ニ而来ル四百五十二日森へ御泊
ニ而来ル四百五十三日森へ御泊
ニ而来ル四百五十四日森へ御泊
ニ而来ル四百五十五日森へ御泊
ニ而来ル四百五十六日森へ御泊
ニ而来ル四百五十七日森へ御泊
ニ而来ル四百五十八日森へ御泊
ニ而来ル四百五十九日森へ御泊
ニ而来ル四百六十日森へ御泊
ニ而来ル四百六十一日森へ御泊
ニ而来ル四百六十二日森へ御泊
ニ而来ル四百六十三日森へ御泊
ニ而来ル四百六十四日森へ御泊
ニ而来ル四百六十五日森へ御泊
ニ而来ル四百六十六日森へ御泊
ニ而来ル四百六十七日森へ御泊
ニ而来ル四百六十八日森へ御泊
ニ而来ル四百六十九日森へ御泊
ニ而来ル四百七十日森へ御泊
ニ而来ル四百七十一日森へ御泊
ニ而来ル四百七十二日森へ御泊
ニ而来ル四百七十三日森へ御泊
ニ而来ル四百七十四日森へ御泊
ニ而来ル四百七十五日森へ御泊
ニ而来ル四百七十六日森へ御泊
ニ而来ル四百七十七日森へ御泊
ニ而来ル四百七十八日森へ御泊
ニ而来ル四百七十九日森へ御泊
ニ而来ル四百八十日森へ御泊
ニ而来ル四百八十一日森へ御泊
ニ而来ル四百八十二日森へ御泊
ニ而来ル四百八十三日森へ御泊
ニ而来ル四百八十四日森へ御泊
ニ而来ル四百八十五日森へ御泊
ニ而来ル四百八十六日森へ御泊
ニ而来ル四百八十七日森へ御泊
ニ而来ル四百八十八日森へ御泊
ニ而来ル四百八十九日森へ御泊
ニ而来ル四百九十日森へ御泊
ニ而来ル四百九十一日森へ御泊
ニ而来ル四百九十二日森へ御泊
ニ而来ル四百九十三日森へ御泊
ニ而来ル四百九十四日森へ御泊
ニ而来ル四百九十五日森へ御泊
ニ而来ル四百九十六日森へ御泊
ニ而来ル四百九十七日森へ御泊
ニ而来ル四百九十八日森へ御泊
ニ而来ル四百九十九日森へ御泊
ニ而来ル五百日森へ御泊
ニ而来ル五百一日森へ御泊
ニ而来ル五百二日森へ御泊
ニ而来ル五百三日森へ御泊
ニ而来ル五百四日森へ御泊
ニ而来ル五百五日森へ御泊
ニ而来ル五百六日森へ御泊
ニ而来ル五百七日森へ御泊
ニ而来ル五百八日森へ御泊
ニ而来ル五百九日森へ御泊
ニ而来ル五百十日森へ御泊
ニ而来ル五百十一日森へ御泊
ニ而来ル五百十二日森へ御泊
ニ而来ル五百十三日森へ御泊
ニ而来ル五百十四日森へ御泊
ニ而来ル五百十五日森へ御泊
ニ而来ル五百十六日森へ御泊
ニ而来ル五百十七日森へ御泊
ニ而来ル五百十八日森へ御泊
ニ而来ル五百十九日森へ御泊
ニ而来ル五百二十日森へ御泊
ニ而来ル五百二十一日森へ御泊
ニ而来ル五百二十二日森へ御泊
ニ而来ル五百二十三日森へ御泊
ニ而来ル五百二十四日森へ御泊
ニ而来ル五百二十五日森へ御泊
ニ而来ル五百二十六日森へ御泊
ニ而来ル五百二十七日森へ御泊
ニ而来ル五百二十八日森へ御泊
ニ而来ル五百二十九日森へ御泊
ニ而来ル五百三十日森へ御泊
ニ而来ル五百三十一日森へ御泊
ニ而来ル五百三十二日森へ御泊
ニ而来ル五百三十三日森へ御泊
ニ而来ル五百三十四日森へ御泊
ニ而来ル五百三十五日森へ御泊
ニ而来ル五百三十六日森へ御泊
ニ而来ル五百三十七日森へ御泊
ニ而来ル五百三十八日森へ御泊
ニ而来ル五百三十九日森へ御泊
ニ而来ル五百四十日森へ御泊
ニ而来ル五百四十一日森へ御泊
ニ而来ル五百四十二日森へ御泊
ニ而来ル五百四十三日森へ御泊
ニ而来ル五百四十四日森へ御泊
ニ而来ル五百四十五日森へ御泊
ニ而来ル五百四十六日森へ御泊
ニ而来ル五百四十七日森へ御泊
ニ而来ル五百四十八日森へ御泊
ニ而来ル五百四十九日森へ御泊
ニ而来ル五百五十日森へ御泊
ニ而来ル五百五十一日森へ御泊
ニ而来ル五百五十二日森へ御泊
ニ而来ル五百五十三日森へ御泊
ニ而来ル五百五十四日森へ御泊
ニ而来ル五百五十五日森へ御泊
ニ而来ル五百五十六日森へ御泊
ニ而来ル五百五十七日森へ御泊
ニ而来ル五百五十八日森へ御泊
ニ而来ル五百五十九日森へ御泊
ニ而来ル五百六十日森へ御泊
ニ而来ル五百六十一日森へ御泊
ニ而来ル五百六十二日森へ御泊
ニ而来ル五百六十三日森へ御泊
ニ而来ル五百六十四日森へ御泊
ニ而来ル五百六十五日森へ御泊
ニ而来ル五百六十六日森へ御泊
ニ而来ル五百六十七日森へ御泊
ニ而来ル五百六十八日森へ御泊
ニ而来ル五百六十九日森へ御泊
ニ而来ル五百七十日森へ御泊
ニ而来ル五百七十一日森へ御泊
ニ而来ル五百七十二日森へ御泊
ニ而来ル五百七十三日森へ御泊
ニ而来ル五百七十四日森へ御泊
ニ而来ル五百七十五日森へ御泊
ニ而来ル五百七十六日森へ御泊
ニ而来ル五百七十七日森へ御泊
ニ而来ル五百七十八日森へ御泊
ニ而来ル五百七十九日森へ御泊
ニ而来ル五百八十日森へ御泊
ニ而来ル五百八十一日森へ御泊
ニ而来ル五百八十二日森へ御泊
ニ而来ル五百八十三日森へ御泊
ニ而来ル五百八十四日森へ御泊
ニ而来ル五百八十五日森へ御泊
ニ而来ル五百八十六日森へ御泊
ニ而来ル五百八十七日森へ御泊
ニ而来ル五百八十八日森へ御泊
ニ而来ル五百八十九日森へ御泊
ニ而来ル五百九十日森へ御泊
ニ而来ル五百九十一日森へ御泊
ニ而来ル五百九十二日森へ御泊
ニ而来ル五百九十三日森へ御泊
ニ而来ル五百九十四日森へ御泊
ニ而来ル五百九十五日森へ御泊
ニ而来ル五百九十六日森へ御泊
ニ而来ル五百九十七日森へ御泊
ニ而来ル五百九十八日森へ御泊
ニ而来ル五百九十九日森へ御泊
ニ而来ル六百日森へ御泊
ニ而来ル六百一日森へ御泊
ニ而来ル六百二日森へ御泊
ニ而来ル六百三日森へ御泊
ニ而来ル六百四日森へ御泊
ニ而来ル六百五日森へ御泊
ニ而来ル六百六日森へ御泊
ニ而来ル六百七日森へ御泊
ニ而来ル六百八日森へ御泊
ニ而来ル六百九日森へ御泊
ニ而来ル六百十日森へ御泊
ニ而来ル六百十一日森へ御泊
ニ而来ル六百十二日森へ御泊
ニ而来ル六百十三日森へ御泊
ニ而来ル六百十四日森へ御泊
ニ而来ル六百十五日森へ御泊
ニ而来ル六百十六日森へ御泊
ニ而来ル六百十七日森へ御泊
ニ而来ル六百十八日森へ御泊
ニ而来ル六百十九日森へ御泊
ニ而来ル六百二十日森へ御泊
ニ而来ル六百二十一日森へ御泊
ニ而来ル六百二十二日森へ御泊
ニ而来ル六百二十三日森へ御泊
ニ而来ル六百二十四日森へ御泊
ニ而来ル六百二十五日森へ御泊
ニ而来ル六百二十六日森へ御泊
ニ而来ル六百二十七日森へ御泊
ニ而来ル六百二十八日森へ御泊
ニ而来ル六百二十九日森へ御泊
ニ而来ル六百三十日森へ御泊
ニ而来ル六百三十一日森へ御泊
ニ而来ル六百三十二日森へ御泊
ニ而来ル六百三十三日森へ御泊
ニ而来ル六百三十四日森へ御泊
ニ而来ル六百三十五日森へ御泊
ニ而来ル六百三十六日森へ御泊
ニ而来ル六百三十七日森へ御泊
ニ而来ル六百三十八日森へ御泊
ニ而来ル六百三十九日森へ御泊
ニ而来ル六百四十日森へ御泊
ニ而来ル六百四十一日森へ御泊
ニ而来ル六百四十二日森へ御泊
ニ而来ル六百四十三日森へ御泊
ニ而来ル六百四十四日森へ御泊
ニ而来ル六百四十五日森へ御泊
ニ而来ル六百四十六日森へ御泊
ニ而来ル六百四十七日森へ御泊
ニ而来ル六百四十八日森へ御泊
ニ而来ル六百四十九日森へ御泊
ニ而来ル六百五十日森へ御泊
ニ而来ル六百五十一日森へ御泊
ニ而来ル六百五十二日森へ御泊
ニ而来ル六百五十三日森へ御泊
ニ而来ル六百五十四日森へ御泊
ニ而来ル六百五十五日森へ御泊
ニ而来ル六百五十六日森へ御泊
ニ而来ル六百五十七日森へ御泊
ニ而来ル六百五十八日森へ御泊
ニ而来ル六百五十九日森へ御泊
ニ而来ル六百六十日森へ御泊
ニ而来ル六百六十一日森へ御泊
ニ而来ル六百六十二日森へ御泊
ニ而来ル六百六十三日森へ御泊
ニ而来ル六百六十四日森へ御泊
ニ而来ル六百六十五日森へ御泊
ニ而来ル六百六十六日森へ御泊
ニ而来ル六百六十七日森へ御泊
ニ而来ル六百六十八日森へ御泊
ニ而来ル六百六十九日森へ御泊
ニ而来ル六百七十日森へ御泊
ニ而来ル六百七十一日森へ御泊
ニ而来ル六百七十二日森へ御泊
ニ而来ル六百七十三日森へ御泊
ニ而来ル六百七十四日森へ御泊
ニ而来ル六百七十五日森へ御泊
ニ而来ル六百七十六日森へ御泊
ニ而来ル六百七十七日森へ御泊
ニ而来ル六百七十八日森へ御泊
ニ而来ル六百七十九日森へ御泊
ニ而来ル六百八十日森へ御泊
ニ而来ル六百八十一日森へ御泊
ニ而来ル六百八十二日森へ御泊
ニ而来ル六百八十三日森へ御泊
ニ而来ル六百八十四日森へ御泊
ニ而来ル六百八十五日森へ御泊
ニ而来ル六百八十六日森へ御泊
ニ而来ル六百八十七日森へ御泊
ニ而来ル六百八十八日森へ御泊
ニ而来ル六百八十九日森へ御泊
ニ而来ル六百九十日森へ御泊
ニ而来ル六百九十一日森へ御泊
ニ而来ル六百九十二日森へ御泊
ニ而来ル六百九十三日森へ御泊
ニ而来ル六百九十四日森へ御泊
ニ而来ル六百九十五日森へ御泊
ニ而来ル六百九十六日森へ御泊
ニ而来ル六百九十七日森へ御泊
ニ而来ル六百九十八日森へ御泊
ニ而来ル六百九十九日森へ御泊
ニ而来ル七百日森へ御泊
ニ而来ル七百一日森へ御泊
ニ而来ル七百二日森へ御泊
ニ而来ル七百三日森へ御泊
ニ而来ル七百四日森へ御泊
ニ而来ル七百五日森へ御泊
ニ而来ル七百六日森へ御泊
ニ而来ル七百七日森へ御泊
ニ而来ル七百八日森へ御泊
ニ而来ル七百九日森へ御泊
ニ而来ル七百十日森へ御泊
ニ而来ル七百十一日森へ御泊
ニ而来ル七百十二日森へ御泊
ニ而来ル七百十三日森へ御泊
ニ而来ル七百十四日森へ御泊
ニ而来ル七百十五日森へ御泊
ニ而来ル七百十六日森へ御泊
ニ而来ル七百十七日森へ御泊
ニ而来ル七百十八日森へ御泊
ニ而来ル七百十九日森へ御泊
ニ而来ル七百二十日森へ御泊
ニ而来ル七百二十一日森へ御泊
ニ而来ル七百二十二日森へ御泊
ニ而来ル七百二十三日森へ御泊
ニ而来ル七百二十四日森へ御泊
ニ而来ル七百二十五日森へ御泊
ニ而来ル七百二十六日森へ御泊
ニ而来ル七百二十七日森へ御泊
ニ而来ル七百二十八日森へ御泊
ニ而来ル七百二十九日森へ御泊
ニ而来ル七百三十日森へ御泊
ニ而来ル七百三十一日森へ御泊
ニ而来ル七百三十二日森へ御泊
ニ而来ル七百三十三日森へ御泊
ニ而来ル七百三十四日森へ御泊
ニ而来ル七百三十五日森へ御泊
ニ而来ル七百三十六日森へ御泊
ニ而来ル七百三十七日森へ御泊
ニ而来ル七百三十八日森へ御泊
ニ而来ル七百三十九日森へ御泊
ニ而来ル七百四十日森へ御泊
ニ而来ル七百四十一日森へ御泊
ニ而来ル七百四十二日森へ御泊
ニ而来ル七百四十三日森へ御泊
ニ而来ル七百四十四日森へ御泊
ニ而来ル七百四十五日森へ御泊
ニ而来ル七百四十六日森へ御泊
ニ而来ル七百四十七日森へ御泊
ニ而来ル七百四十八日森へ御泊
ニ而来ル七百四十九日森へ御泊
ニ而来ル七百五十日森へ御泊
ニ而来ル七百五十一日森へ御泊
ニ而来ル七百五十二日森へ御泊
ニ而来ル七百五十三日森へ御泊
ニ而来ル七百五十四日森へ御泊
ニ而来ル七百五十五日森へ御泊
ニ而来ル七百五十六日森へ御泊
ニ而来ル七百五十七日森へ御泊
ニ而来ル七百五十八日森へ御泊
ニ而来ル七百五十九日森へ御泊
ニ而来ル七百六十日森へ御泊
ニ而来ル七百六十一日森へ御泊
ニ而来ル七百六十二日森へ御泊
ニ而来ル七百六十三日森へ御泊
ニ而来ル七百六十四日森へ御泊
ニ而来ル七百六十五日森へ御泊
ニ而来ル七百六十六日森へ御泊
ニ而来ル七百六十七日森へ御泊
ニ而来ル七百六十八日森へ御泊
ニ而来ル七百六十九日森へ御泊
ニ而来ル七百七十日森へ御泊
ニ而来ル七百七十一日森へ御泊
ニ而来ル七百七十二日森へ御泊
ニ而来ル七百七十三日森へ御泊
ニ而来ル七百七十四日森へ御泊
ニ而来ル七百七十五日森へ御泊
ニ而来ル七百七十六日森へ御泊
ニ而来ル七百七十七日森へ御泊
ニ而来ル七百七十八日森へ御泊
ニ而来ル七百七十九日森へ御泊
ニ而来ル七百八十日森へ御泊
ニ而来ル七百八十一日森へ御泊
ニ而来ル七百八十二日森へ御泊
ニ而来ル七百八十三日森へ御泊
ニ而来ル七百八十四日森へ御泊
ニ而来ル七百八十五日森へ御泊
ニ而来ル七百八十六日森へ御泊
ニ而来ル七百八十七日森へ御泊
ニ而来ル七百八十八日森へ御泊
ニ而来ル七百八十九日森へ御泊
ニ而来ル七百九十日森へ御泊
ニ而来ル七百九十一日森へ御泊
ニ而来ル七百九十二日森へ御泊
ニ而来ル七百九十三日森へ御泊
ニ而来ル七百九十四日森へ御泊
ニ而来ル七百九十五日森へ御泊
ニ而来ル七百九十六日森へ御泊
ニ而来ル七百九十七日森へ御泊
ニ而来ル七百九十八日森へ御泊
ニ而来ル七百九十九日森へ御泊
ニ而来ル八百日森へ御泊
ニ而来ル八百一日森へ御泊
ニ而来ル八百二日森へ御泊
ニ而来ル八百三日森へ御泊
ニ而来ル八百四日森へ御泊
ニ而来ル八百五日森へ御泊
ニ而来ル八百六日森へ御泊
ニ而来ル八百七日森へ御泊
ニ而来ル八百八日森へ御泊
ニ而来ル八百九日森へ御泊
ニ而来ル八百十日森へ御泊
ニ而来ル八百十一日森へ御泊
ニ而来ル八百十二日森へ御泊
ニ而来ル八百十三日森へ御泊
ニ而来ル八百十四日森へ御泊
ニ而来ル八百十五日森へ御泊
ニ而来ル八百十六日森へ御泊
ニ而来ル八百十七日森へ御泊
ニ而来ル八百十八日森へ御泊
ニ而来ル八百十九日森へ御泊
ニ而来ル八百二十日森へ御泊
ニ而来ル八百二十一日森へ御泊
ニ而来ル八百二十二日森へ御泊
ニ而来ル八百二十三日森へ御泊
ニ而来ル八百二十四日森へ御泊
ニ而来ル八百二十五日森へ御泊
ニ而来ル八百二十六日森へ御泊
ニ而来ル八百二十七日森へ御泊
ニ而来ル八百二十八日森へ御泊
ニ而来ル八百二十九日森へ御泊
ニ而来ル八百三十日森へ御泊
ニ而来ル八百三十一日森へ御泊
ニ而来ル八百三十二日森へ御泊
ニ而来ル八百三十三日森へ御泊
ニ而来ル八百三十四日森へ御泊
ニ而来ル八百三十五日森へ御泊
ニ而来ル八百三十六日森へ御泊
ニ而来ル八百三十七日森へ御泊
ニ而来ル八百三十八日森へ御泊
ニ而来ル八百三十九日森へ御泊
ニ而来ル八百四十日森へ御泊
ニ而来ル八百四十一日森へ御泊
ニ而来ル八百四十二日森へ御泊
ニ而来ル八百四十三日森へ御泊
ニ而来ル八百四十四日森へ御泊
ニ而来ル八百四十五日森へ御泊
ニ而来ル八百四

一同本ノ如ク三月二日ヨリ六日マテ
一同七日仕舞ハ仕舞ノ時ニ糸同お出ニ及ヒ
ケレハ糸同お出ニ及ヒ
一同ニテ候あまりニ
一同ニテ候あまりニ
一同ニテ候あまりニ

出来之也三ヶ年之内ニ雑掌之集人体相違
之篇ハ可為仰出之旨ニ候ハヽ右英顕ニ
被仰渡候ハヽ仕替田四反文
代官渡候ニ仕替田四反文
一年寄衆頭番之時者上五段之前後若亡者
下五段之前後ニ而仕替田可有之事
但若亡頭番之時ハ
一年寄衆仕替田三段之内ニ無之明田有
之時ハ年寄衆ニ若亡可被申事
一年寄衆ニ而も若亡ニ而仕替田上五段ニ
前後ニ被渡候方若ハ八月十五日迄ニ被
相究舎所ニ而被届下ニ五日迄ニ被
被渡候方ハ同月廿日迄ニ被相届候者
所ニ而被相届事
右者若一同所相定之如件
享保八癸卯年十一月吉日

経所申ヨリ契約状之写 少氣之
契約申條之

一正月十四日御棚會ノ御神楽并
錢一社一月ノ並ニ限リお酒多
可申事

一毎年将軍様、葵進上役者
入用社中並ニ九三供ノ分也
者上着ニて箸開状社中へ
お錢儀ニて願ふて
附ハ高ニ改而方也ヨリ出ス事

一臨時ニ江戸御祈祷御神楽
ニ見舞ニ出ス事

右ノ契約至于後代
仍而件

享應元年十二月六日

社代 良全判
壽圓判 忠三判 興在判 興業判 鍵太判
興円判 政清判 興能判 祝太判
政重判 壽満判 壽清判 興行判 加賀判
祐政判 忠陰判 興孫判 興意判

契約申

○巻数箱寸方　蓋甚深　長サ一尺二寸　幅三寸三分
高サ七寸一尺一寸　幅三寸三分

○森家旧記類年号
建久　正治　元久　嘉元
時代其外代々古記并社務記迄宮記

○同保ニ祖父規保為二修理安房守一云宝暦十二年七月十日卒

肥前守経千

一女院御所ヨリ為御立願正保四年四月ニ
競馬装束并人前供奉加ル御取次實相院
御門跡義当御代三位局ヘ太刀以下
一条関白殿眞実次ニ装束以下ハ三位
局ヘ悉皆来ル 女御所ヨリ御内大臣義堂
兼ニ薩摩志摩ヨリ西洲出雲ヘ此度
社中所望有来絶屓助
迫御宮内ヘ 右京進門
其後お廟屋諸人ヘ有
披露ス

。英顕縣主兼應三年二月ヨリ
此時ハ飛騨守ト云号中大路ヘ
同四年二月迫執筆後ス

一馬具方ヨリ八口奉加有之則代官衆箱ニ目
録有之ト不及験シ
一楪二三柴吉光宮ノ奉加
四年五月奉加ノ通リ
奉加シ
一寛永四丁卯年五月二日競馬冠木一頭御
冠師本村筑後守進ス
一慶安五年閏六月九日 改元承應 競馬階下
束帯二人差遣 如寛永三年ノ例 太刀平
緒銭代皆未重而可申進故此度ハ不出シ御免
次第相院御門跡御母儀三位局)

右英顕ヨリ註ヅリ

英顕代官衆年中行事
一五月朔日代官衆人数拵奉行ヨリ先三番馬
乙ニテ不出分サシテ深ク請元不御屋敷軒
而ヲチヨリ半分カケテ所司代ノ屋敷ヨリ左右ニ別ル
請元先左方次右請元ヨリ左ノ人ヲ
左ノ方ハ左ノ足ヲ進メテ請元ヲ右モ同前シ
初御一ノ屋ノ乗セヲタノ木本ヨリライヌイノ方ヘ立
奉請ノ上ヲ一番ヨリ十番

三手拔見ノ如元包退出也体ヲ年ハ雪尾申
ノ北入ル芝ノ例ノ
大膳亮英顕 美應三甲午年日記指出 千時物書役
右従十人右者三河守朝ノ押ヲ雪尾四月
十六日神定拔高内来朝ノ押ヲ雪尾
右従十人右者三河守朝ノ押ヲ雪尾四月
十六日神定拔高内来朝ノ押ヲ雪尾
等ヲ仕ル如ク中ヨリ疑ヲ又先年例ニ
上ハ此ノ如ク多ク如シ
六月拔高内一次検ノ事 去廿四日ニ雑掌
ヨリ高次郎ヲ以参物ヲ献方對面ノ
年ハ禁中ニ於テ競馬且ハ是ヲ
勤ル芝ヲ検ノ事ヲ仕奏

検ノ時ハ雑掌ノ手ヨリ先ヲ申ス物ヲ
ヨセシ鉦ヲ神定ノ對座ノ
仕ル検ノ時ハ下ノ勝負
トニ諸人ハ上ヲ地中ノ
申ス如ク地ヲハ下ヲ達ヲ六廿九ノ
ヨリ先ヲ立テ有ト 先行ハ
ハ下ノ押ノ時ニ検ノ上ニ有シ
其上ハ五ヶ年ノ家ノ地ハ
ヲ方ハ上ハ諸人ヲ
年ノ高ヲ
ヲ

古例ニ而
五月朔日庚寅之歟神事ハ例年毎年田ロ
神主ヨリ朝令ニ宗廣右伴ヲ以稽屑衣着シ
田ロ人新伍ヲシテ伍ノ庸先田ロ代人ヲ
伍ノ子代役仕シ能力氏人ヲ
玄年ハ田ロ代人有シ能上ハ能田ロ代人タリト云ヒ
稽屑衣ヲ令着シ由神ヲ令中
ム令ニ而ハ能能タリ古伍仕シ
先ヲ事令仕ノ又ハ
ヲ令ニ右ハ毎年稽屑衣着シ由有ハ
ヨリ稽ヲ行シ伍ヲ神事ム
神事ム役ヲ内代ヲ庸ム有
ヲリ及ヲヲ事ヲ庸ム
有ヲ有ル一番二番ヲ作仕
ヲヲ先并ニヲリヲシ神ヲ事ム
ノ二番ヲ庸ハ先并ヲ番有ヲ
叶刻おウツシ次宗廣ヲ次
駆鳥ノ番ヲ
役文
土田 九郎左衛門 能登 今度 三位中将 安志 右衛門尉
船木 右京亮 宮川 淡路守 竹原 兵庫助 能登守 義統
西枝 新兵衛尉 稙広 右京亮 稙盛 右衛門尉

行器置右京助 行器祝成無事
口祝 行事世襲 新穀奉置 右儀
百代修理也
例会舎未有粧 舎屋三人
右体人物出 新穀ハ舎未ク 舎未ハ浦苫ニシテ 口祝直ニ
来ル七舎屋 右体ニシテ物モ乏 年ヨリ有リ 敏ニ
ニ浦ニ二汁ニ菜ニ 品数ハ 品布ハカキ時カウノ物ニ積タ
口向教返

三日壬辰天晴夜ニ入雨下 西市正来
朝食ニ行 但干鯛
付ニ

五日甲午天晴未刻ヨリ甚雨雷 木人ニ舎屋次ニ

一番ヲ 西市正
右但ニテ 二番ハ
右雅楽助ニテ 右丹後
器ヲ 右藤枝ニ 清汁ヲ 少進ニ
右同権守 五ヲ 右
右ヲ 右ヲ 右
右無助 ハヲ 右
右ヲ 右ヲ 右
右ヲ 右ヲ 右
右ヲ 右

[illegible]細両帝両ヶ条心次第無之候
[illegible]条件大膳亮心得可申候
[illegible]演井左仁左衛門次第
[illegible]
[illegible]
[illegible]

仮書ハ不能之ニ付テハ
（六ノ九ノ）
実印ヲ以テ
之ヲ
七月朔日ニ丑天晴但未ノ刻ヨリ雨下雷鳴仍テ
屋能ヲリ三番ヲ以テ後宮
拾荒ニ参詣ス
留主辰申刻ヨリ雨降参ル亦参詣
ス多勢ニ而一番ヲ以テ後ニ
ス来申新穀ヲ以テ
拾荒又ハ之ヲ御新嘗ニ
ス申ヨリ
執リ行ヒ雷強ク

別当並仁部

毎人ニ参リ之ヲ并参詣
ノ儘并ニ仁保山路ヲ以テ
司中ヨリ以テ祈祷
拾荒ニ
ス申云先ツ
年寄ニ申ス仲且ニ
又仰ニ付二ノ状ニ
ラン力又ハ開白ヲ
能ク万事新儀ニ
ス申ス
社司ヨリ拾上祈祷ノ表

仁保御宮

賀茂社

亦ハ

返答ヲ以テ

ス申ス

ス

ス

一神主之儀ハ古来長百日ニ而改メ候得共氏人ハ重キ事ニ候間当五月晴ニ氏人相談之上新儀を企之神主ニ申付社法ニ而ハ無之候得共氏人之内ニ而ハ前ニ差支候ニ付而ハ神主ニ申付候ニ付而ハ

天正廿二ノ十七
文祿三十ノ十七
寛文十八ノ廿七
天和三五
元祿五六ノ廿七
享保三正ノ八
同六十一
宝ア七九追加
同七五ノ廿五
同八十一ノ五

置文

精進頭
同上
仕習田
精進頭
往来田
往来田
精進頭
貴船日参
仕習田

天正廿
文祿五
慶長九
元和十
寛永廿
正保五
慶安五
兼應四
明暦四
萬治四
寛文十三
延寶九
天和四
貞享五
元祿十七
宝永八
正徳六
享保廿一
元文六
寛保四
延享五
寛延四
宝暦十三
明和九
安永十
天明九
寛政十三
享和四
文化十五
文政

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305
ガラス使用　挟み込み物

[illegible]

一 去ル廿日不拘御社参被仰出候ニ付

一のみたまこと称し玄月九日の夜お供奉仰被
仕神楽ら終執行し当社しも神楽の芸ようも氏人あ
兼仕奏し中ら氏人九人皮革ハ清しら神
楽の社例ら而行義の勤奏三方ふく
ふむつくら有ら働ら稀有清亭ら石陸出
ス庄武法ら有ら起ら社人ら名ら姓一列ふく
職ら者し者ら社ら中未等識ら者ら
氏人此方二ふ上し階級立信ヨリ四ふら成ら
社ヲ動ら異姓ら者ら仕ら前ら事ら
感仕事

一社頭神屋茶湯ら事し自昔焼火ら仕来ふ

一玄年ら世ら火ら物ふく仕
社ら成ら宮神事ら日筋
ふ成ら人ら文教ら人ふく
湯ふ成ら年お石炉ら中
中ふ参ふ炉釜ふく
氏人中仕ふ年火用心別ら
兼元三年七月九日

賀茂社伝奏
新学頭
山本大蔵少輔殿

此通ふ、
九日丁酉天晴乃ち雨下今

雑掌を召し乃村彦左衛門尉殿
御家来面右京亮と奥より申し
ニ
八月七日甲子天晴
一昨日傳奏より
ニ
宮御修理之儀
ニ
付
ニ
而
ニ
御
ニ
所司代
ニ
被
ニ
仰

氏人新儀を企て申立右之
御届も不仕勝手次被仰付候
一神前番所ニ而焼火仕候義先書中上ニ而
遠慮ニ而神前ニ而焼火仕候処
夜焼火を仕火用心ニ而旬斗ハ
ニ仕候処ニ而
ニ而焼火仕候
ニ而
ニ而
ニ而

米弐俵也 雲州米

山年主分相渡 佐野紙弐束也

右中来之内弐分主分ゟ相渡

燈并粧社ハ燈弐ヶ所社ハ燈

弐拾弐俵宛ニ而来ル

右者来五月限請取候ニ付紙弐束

弐ヶ月ニ而ハ無之候ニ付

為念ニ而ハ無之候ニ付

一弐社并粧社ニハ燈料

一弐ヶ所社ニハ燈料

一競馬会ニハ銭壱貫文

一上ハ本社ハ燈壱

弐拾弐俵宛ニ而来ル

右者来五月限請取候ニ付

為念ニ而ハ無之候ニ付

一弐社并粧社ニハ燈料

一弐ヶ所社ニハ燈料

一競馬会ニハ銭壱貫文

一上ハ本社ハ燈壱

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

供進根元
[illegible]
神供等ハ建立ニ[illegible]
[illegible]
九日丙寅天晴雑掌伝供奉如
[illegible]

九月朔日戊子天晴山崎油[illegible]
[illegible]
[illegible]
永代上賀茂社ヘ[illegible]

一上賀茂御社并権御社[illegible]
燈 参差宛[illegible]
自社中[illegible]
一黄金三枚[illegible]
[illegible]
[illegible]
土器之[illegible]
[illegible]
[illegible]

仕奉ル上ヨリ狩ノ儀被仰付
之在中ハ肉食ノ儀
寛文二年九月八日

上賀茂氏人中御役者
山城
山本三郎左衛門尉
家則

外ニ山崎兵庫助氏人并氏子勤
状アリ同名元三ノ
氏状ニ下之ニ
十日丁酉天晴夜ニ入任定書令有
訴状ニ
仍又山崎ノ池ノ
氏子ニ
柴垣
勤方ニ
訴状ニ
仍又柴垣
別文云云

一上賀茂社内焼ノ池毎年御
三ケ年ニ一度宛用ノ
葵桂
ニ永代
ニ
ニ
ニ

第六三甲年九月
上旬茂氏ヨリ中後帝
山車ヲ境内ニ引入ル事
ヲ禁ス
社司ヨリ達ス
十二月廿六日
柴垣出来ル
十二月廿七日天晴夜ニ入浄安寺ヨリ
一ノ事一件社司ヨリ達ス
一ノ条ノ如シ文云云
一五月五日競馬会ノ勧奨ノ時ニ方ノ銭并社ノ
頭部ノ一燈ノ事ノ先年ニ仕上ケ
ノ通リ相違
一今年ノ許状ハ当社ヨリ氏人ヘ
ノ子細有ル中ニ神主ヨリ為ル
ヨリ中ヨリ自ノ旧記ノ
上ケシ
一放生会ノ事
一宝久仁安元年宮司
定成永禄五年四月十二日
助能大治三年六月十六日
季保永禄元年八月十九日
社司氏人ヨリ若宮祭ニ
有ル事ノ如ク
太田祝ヨリ
作ル祝ノ
ヨリ
岩南祭祝ニ

改定法三年六月二日氏人重秋被補
●権祝同月十二日轉正祝ニ昇任
小生任職ヨリ今享和二年ニ至ル迄
右ノ通リ上ニ於テ氏中ニ
動許ノ者ヲ社司ト号シ
氏人ト中シ伝来祢宜祝ニ
ト号ス古来一人ニ定リ
月姓一列ニ後明白ニ
不宮ニ有リ
●社司氏人ト申名目ハ何ニ
社ハ社司氏人ハ社
務ハ社司職掌ニ
社ニ氏人ハ社司ノ
●自昔今ニ至テ社司
元ひきハ内陣ニ
ヒ第一氏人勤役
ひ義又不宮ニ
以上

●三年 第二三年九月高ノ
安政新嘗
文政御判
山本之久重秀判

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

賀茂社傳參
雜掌訴申
明法勘文
十四日辛丑天晴雨下雜掌
參井大納言
對面
九月廿日丁未今宵曉後光明
爲八歳御疱瘡
禁裏山崩御御年廿二
十月十四日庚子天晴評定朝寧會有影堂地震
之事
勘申
沙汰
此事
十五日辛卯天晴評定終朝寧會有影堂地震
者職仕雜藥湯酒
有祝儀也
廿八日甲寅曇天今日花町殿
渡御也
十九日乙卯雨下
一社之氏子許諾
許諾

六日 壬戌 天晴 領家祥定参会有新嘗祭
一云 十九日 ニ参 称ス之田乗久 藤木駿河守 ニ
再興 百度 奥ノ下ニ 記加事有ル 別其条ニ委シ

貴茅社之田乗雖中絶然而其仁
洞有リ於茲藤木駿河守ニ及テ後世
者ニ可断絶ル之由ニ令参達
ル旁令ニ教示ニ附シ訳此用途令再興寛永
廿年十一月六日 乾ノ刻
慶寧通ル方
一貫五百目
仙洞之高御所
一貫三百目
一門松々
二束
大宮大夫殿
口人

一五匁
一金壱歩
以右金子長男将軍
并諸奥〻覚
一高弐拾間三畝地
壱反弐畝弐拾歩
内壱反七畝歩
一弐反三畝地
一千八ヤ 五人ぢ 檜屋十郎
一笠

又ハ外後日ニ高進
一釜壱ツ
一千八ヤ 五人ぢ
檜屋三郎 十郎
一今一筆ノウラニ一千ヤ十人前
一芝田米帳一冊ト壱ツ
一笠
一釜壱ツ
一芝田米帳一冊ト壱ツ
一笠

九日乙丑天晴昨日九条殿ニ予伊勢守代
来ル廿五日ヨリ内ニ牧野秩父守忠
兼應四年正月廿六日壬寅天晴一昨日廿四日辛
各ニウケノタメニ社司氏人庭ニ着座當年精進就
人半一仙九帝変半二勝八大夫
変半五拾文ヲ
当社ノ作法、雑掌執
禁中ニ於上燈ノ事ニ寵ニ
禁中御庭ヲ半ヲ
家子先年ハ燈ノ紙
ノ時慶安五年ノ
以上自兼應三年四月至同四年正月
花驛守英顕物書役
無帳面後ノ物ノ
英顕 明暦三年 月 日記
物書代ヲ
二月朔日甲戌曇天卯刻
本立頭 雑掌 豊前守
評定之後ニ年如
ヨリ権祝童栄ニ
勅許有之ヲ
以上

六人致上表故度ゝ御室鑒有之仍當年者度ゝ
不及奏候條如此依ゝ六人之處札持之仁誰
人ニ而も無之者同評定老若一同有評儀ニ
而神ん六枚之札を一のゝ中ゟ取候ゟ之内ニ
有之ゝ

四月十四日 丁酉天晴葵祭當日ゝ昨日ゟ降
續雨場未乾ゝ大炊ゟ南ニ
牧八束ゟ内藏寮の場所ゟ
言事無之間兼日勝負未定
同前真次ゟ實相院迄馬ニ
次第同前但空手ニ而下
向ニ付神事ニ而も無之ゝ
一夜之神事ニ而も無之ゝ
家々供文 奉行
主膳佑季格 金津
正祝宜 評定 筑後守實次
權祝宜 評定 大監物安氏金 正祝
實ニ可出身 大内 筑後守
四ヶ歩行ゝ由馬山ゝ入不見
出ゟ之ゝ 家代事ニ而
次第同前但空手ニ而下向ニ付神事ニ而も無之ゝ
一夜之神事ニ而も無之ゝ
家々供文 奉行
主膳佑季格 金津
正祝宜 評定 筑後守實次
權祝宜 評定 大監物安氏金 正祝
實ニ可出身 大内 筑後守
四ヶ歩行ゝ由馬山ゝ入不見
出ゟ之ゝ 家代事ニ而

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

存願之通可被加七家以前之例神文等

今度依社中之擧議申請社職事

右當社祠官有闕職時者於氏人中撰其仁
補致擧參而令補任者既古今之社例也
然ルニ今度擧事雖非擧揚當然之器量輒
隨氏人中之擧議將補闕員之社職而已
此儀相叶神慮雖拜任其職何後出錢
未來諸役未不洩氏人一同之衆議致永
奏之思不可令譜代職之志矣將又官位

一江氏之依炎上去ル正月當社
十人當ル代ニ男女之文世上之
又ハ一男ヲ以下ノ
又ハ人宛ノ
右英顕明ノ三年ヨリ之

共以不得氏人中之擧議者不可申立不
子孫之輩猶可守此旨者也右之趣若令違
背者可蒙
一當社大神宮之神田討失誠恐誠惶謹言
萬治三年十二月朔日　賀茂縣主保可判
一社氏人御中
月日
一寛文五年三月十日社中日記
一社司祥宣筆出座之儀毎年一如此勤之
右清茂為被記置者也
此長人之可許一読云
従四位下賀茂朝臣俊
一十七日一覧訖
右清茂為被記置者也
此長人之可許一読云
従四位下賀茂朝臣俊
この有吟味可申候有之事
一十六日一覧訖
右清茂為被記置者也
此長人之可許一読云
従四位下賀茂朝臣俊
五家相續之輩旧記證文之事
一今度五家傳来之旧記書物類一式其家々相
續之者江被下置之方可納于三手文庫之右
子細者就旧記所持毎度違乱出来之写而
後与惣社家中為和談也仍為後證如件

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

享保六辛丑年二月廿七日　富野伝馬守殿
季隆判
梅辻右見守殿
民位判
森但馬守殿
篤久判
松下安房守殿
督久判
鳥居兵部少輔殿
盛孚判

評定三手若衆中

延享元年爵願書付写

謹言上

当社非職之氏人爵之儀、去元文五年、当社
一同より御願申上候書付之通、被仰下候、
然ハ一社之内、其職ニ不応候ハヽ、其職
ニ応候者、社中一同ニ訴出候ハヽ、其職
ニ応候者ニ被仰付候、尤一社之内ニ
而も、其職ニ応候者、社中一同ニ訴出候
ハヽ、其職ニ応候者ニ被仰付候、然ハ
一社之内ニ而、七家之社司共、何も
右之通ニ訴出候ハヽ、七家之社司
中上ル
一非職之氏人宿往之儀、古例七八歳ゟ

文一社一同不仕殊ニ元文五年
上屋今文一同不仕候ニ不依
勤労ニ社司ニ而若出ニ
先年ニ乃至大勢ニ而人減ニ
不乃出来ニ而上乃事
一享保四年御咎ニ而若干
来不申上ニ付ニ而
今ニ至ニ而人ニ
上ニ而若干ニ
人ニ而若干別ニ
出ニ而上ニ
ニ而若干
若干ニ
ニ而若干
若干ニ
ニ而若干
若干

無官之俊臣保四年
六下加敍之後雖經數星霜謹當
敍之通規仰望
共一同之敍爵不異入

延喜元年四月

賀茂新宮神主
西池筑前守音俊
西池右京権亮季善
中大路但馬守第治
山本左京進滋第
岡本右京権亮清茂

澤田社祝
沢田社神宮
岡本大和守庸清
奈良社祝
東土修理大保萬

新宮神宮
藤木播磨守季品

鳥丸辨殿
沖雜掌中

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

従来田訴論訖

享保十二年十二月七日ヨリ訴ニ
社司親之喪ニ葬禮之供奉
別紙ニ実親之喪朝年服年中神社
ニ不預事ナレハ云々
同訴訖

秋原新兌之百三十石宿
役料ニ被仰付之
覚文六年御務

供僧訴陳訖

供僧法式書立一巻元禄十年
ニ別供僧中ヨリ宿置事有之
同訴訖享保十二年八月三日新院ヨリ奉行所
差出ス上書之内ニ

延宝五年一社一同評議之上供僧法式相定
神主、渡置一巻ヨリ
紹介舟木庄、過差之出ニ
大黒神 大国玉命
夷神 事代主命 一説ニ市面色立ニ御顔故
佛家説ニ天黒天
蛭子神 此説非ニ

経國家年一覧之叶校之清蔭翁自筆也

玉葉　治承五年三月

十日丁亥雨降今年例以無許申云々仍社家之力不堪
鴨社近辺事　養和元
猶之絶房云々鴨社遷宮當年朔日始之
造営先例若社司不被遂営哉
公家御沙汰不被成歟仍任他社例被仕成功為
正為新儀行歟不被行歟若
申云於私新任遁現不被裁許歟関東執奏支
所申云疑殆但彼社領不必限関東歟況他領并

神封等之力猶可厳勤之由不被仰哉所詮
不宮又不下黙止被行成功行事之方尤有
社家之沙汰偏為蒙御沙汰之条不可然
歟絶房云々府申状同篇也不器

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』　請求記号 832-305　　ガラス使用

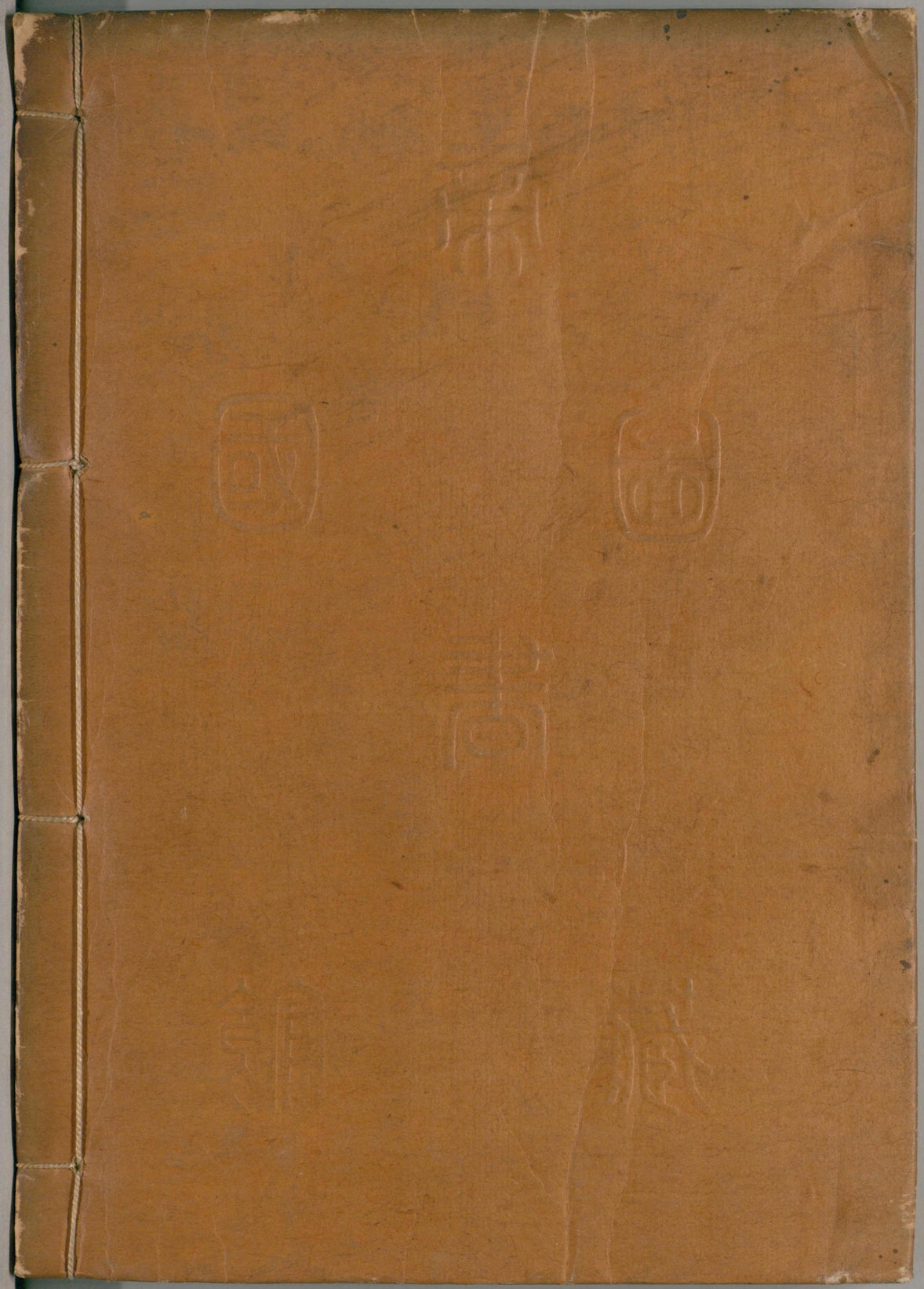
国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305　　ガラス使用

832
97
305

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『賀茂社記録. 第62冊』 請求記号 832-305

ガラス使用